研究課題　静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　浦木賢治（静嘉堂文庫美術館）

　所内共同研究者　山口英男・稲田奈津子

　所外共同研究者　吉田恵理（静嘉堂文庫美術館）・市川理恵（駒沢女子大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　（公財）静嘉堂が所蔵する文化財は、明治期から昭和戦前期に三菱創業家の岩﨑彌之助（三菱第二代社長、一八五一〜一九〇八）、小彌太（三菱第四代社長、一八七九〜一九四五）父子により蒐集されたコレクションである。そのなかには、明治期の廃仏毀釈により寺院等から市場へ流れたと考えられる、奈良時代以降に調進されたいわゆる「五月一日経」「善光朱印経」などの古写経群が所蔵されている。これらは近代に形成された財閥系の古写経コレクションの一つとして、貴重な古写経群といえる。しかし、その公開は静嘉堂文庫美術館での展観等に留まり、撮影も充分ではない。本研究では、古写経群の調査、経典全紙のデジタル写真撮影を行い、経典としての基本情報（紙数、界線の幅、罫高等）の収集・整理、経典の特定、料紙基本データ（縦横寸法、厚さ、密度、簀・糸目幅、填料の有無等）の収集・整理等を行い、研究資源化を図る。その成果を目録化し公表することで、古写経研究や料紙研究等に寄与することを企図する。

（２）研究の成果

　静嘉堂所蔵古写経群は美術庫と書庫の二ヶ所に分蔵され、これまでその全容は紹介されていなかった。古写経の巻頭から巻末まで全体を撮影されることもなく、そのため古写経研究への貢献も限定的な状況であった。  
このたびの共同研究で、古写経群の全容を把握し、これまで未調査であった写経の基本調査も行い目録を作成した。未公開の経典も含め、古代から近世にいたる写経を巻頭から巻末まで高解像度デジタル撮影（全九一五カット）を行い、今後、閲覧に供することを計画している。  
共同研究の過程では、「善光朱印経」と「五月一日経」の本文を比較した市川理恵氏の論考が刊行された。この論考では本文全文の詳細な比較検討により新知見を導き出す研究であるが、対象となる古写経の全容を調査･撮影したからこそ結実した研究ともいえる。また静嘉堂が所蔵する「楞伽経」と他館が所蔵する「楞伽経」の関係性についても考察をすすめており、古写経の本文や界幅などの仕様が明確になったからこそ、他館の古写経との異同を検討することができた。また、このたびのデジタル撮影では付属の箱書も対象としており、そこから幕末維新期に活躍した好古家・松浦武四郎が所蔵した古写経が静嘉堂所蔵古写経群に含まれていることが明らかとなった。今後、これらの成果を論文等にまとめて公開する予定である。